

エズラ記4-6章「神の力づけ」

1A 工事の阻止 4

1B サマリヤ人の反対 1-6

2B 「反抗の民」という誹り 7-24

2A 工事の再開 5

1B 主が共におられる預言 1-5

2B 役人の書状 6-17

3A 神殿の完成 6

1B 補強する命令 1-12

2B 主の与える喜び 13-22

本文

エズラ記 4 章を開いてください。早速、本文に入りましょう。

1A 工事の阻止 4

1B サマリヤ人の反対 1-6

4:1 ユダとベニヤミンの敵たちは、捕囚から帰って来た人々が、イスラエルの神、主のために神殿を建てていると聞いて、2 ゼルバベルと一族のかしらたちのところに近づいて来て、言った。「私たちも、あなたがたといっしょに建てたい。私たちは、あなたがたと同様、あなたがたの神を求めているのです。アッシリヤの王エサル・ハドンが、私たちをここに連れて来た時以来、」3 しかし、ゼルバベルとヨシュアとその他のイスラエルの一族のかしらたちは、彼らに言った。「私たちの神のために宮を建てることについて、あなたがたと私たちとは何の関係もない。ペルシヤの王、クロス王が私たちに命じたとおり、私たちだけで、イスラエルの神、主のために宮を建てるつもりだ。」4 すると、その地の民は、建てさせまいとして、ユダの民の気力を失わせ、彼らをおどした。5 さらに、議官を買収して彼らに反対させ、この計画を打ちこわそうとした。このことはペルシヤの王クロスの時代からペルシヤの王ダリヨスの治世の時まで続いた。

ここに出てくる「ユダとベニヤミンの敵」とは、周囲の住民、サマリヤ人のことです。アッシリヤ捕囚によって、北イスラエルからイスラエル人が捕え移されて、それと交互に他にアッシリヤが征服した地域から他の民族をイスラエル北部に強制移住させました。ここに一部残っているイスラエルの民と、他民族の間で生まれたのが、サマリヤ人と言います。ユダの民がバビロンによって捕え移されたのが紀元前 568 年、そして今、紀元前 536 年以降であります。その三十年以上の間に、サマリヤ人はユダヤも含めて自分たちの土地であるという既得意識を持ちました。そこに、ユダヤ人が戻ってきたのです。サマリヤ人としてみれば、我が土地であるかごとく住みつき、そして神殿を建て始めたので、その既得権が奪われた思いになりました。

ここから始まる確執、サマリヤ人とユダヤ人との確執は新約聖書時代まで続きます。有名なサマリヤの女の話の中に、こういう注釈を使徒ヨハネは付けています。「そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」・ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである。・(4:9)」付き合いをしなかった、とあります。福音書の中にあるサマリヤ人へのユダヤ人の敵意、またサマリヤ人が抱いているユダヤ人への敵意は、この事件から始まったのです。

ゼルバベルを始め、帰還した民は律法に熱心な人々でした。バビロンに捕え移される原因は、先住民の他の神々を拝んだためであることをモーセの律法からよく知っていました。そして、他の神々を拝んだのは先住民の女たちをめぐったからであることを、よく知っていました。そこで、痛烈な反省と悔恨から、異邦人とは一切交わらないという誓いを持っていました。そこで、サマリヤ人たちが共に建てたいと言っても、このことには一切関わりのないことだときっぱりと断ったのです。

彼らがこう言っています。「私たちは、あなたがたと同様、あなたがたの神を求めているのです。・私たちは、あなたがたの神に、いけにえをささげてきました。」これは半分当たっています。彼らは、ヤハウエの神の名によっていけにえを捧げていました。けれども、自分たちの先祖が携えてきた異教の神々も拝んでいました。列王記第二 17 章に、そのことの背景が詳しく書かれています。アッシリヤがイスラエルの民を捕え移したことが書かれています。捕え移された民から祭司を連れ戻させて、移り住んだ諸国の民にどのようにして、イスラエルの神、ヤハウエを礼拝するかを教えました。けれども、それぞれの民は、めいめいに自分たちの神々も作っていたのです。そこで、33 節にこう書いてあります。「彼らは主を礼拝しながら、同時に、自分たちがそこから移された諸国の民のならわしに従って、自分たちの神々にも仕えていた。(17:33)」そして列王記の著者は続けて、彼らのしていることが主を恐れているのでもなく、主の命令を守っているのでもない、という説明を行っています。

ですから、サマリヤ人は第一に他の神々をあがめ、そして第二にヤハウエをあがめていたのに対して、ユダヤ人はヤハウエが第一であり、第二も第三もなく、異教の神々は捨てていたのです。けれども、共通項があるということで、似ているということで、同じ頸木を負わせようとサマリヤ人はしています。その誘いに乗らなかったのがゼルバベルです。神の教会にも、常にその圧力がかけられます。世にあるものと、教会には似たように見えるもの、同じように見えるものがたくさんあります。だから取り入れては良いではないか、と人々は言います。

けれども、教会は似て非なるものです。世間で行われていることと似ているようで、その二つは全く相いれません。使徒パウロは、「不信者とつり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。(2コリント 6:14)」と言いました。私たちは、あらゆる知恵を尽くして、思いの中にある世の価値観とそうではないキリストの知識を識別していくことによって、教会の中に聖めを保つことができます。識別し、神の命令に従い、思いの中にある世は捨て去らなければいけません。

ゼルバベルとその一族が協同の建設を断ると、サマリヤ人は、「建てさせまいとして、ユダの民の気力を失わせ、彼らをおどした。」とあります。彼らは拒絶されたから執拗に阻止しようとしたのではなく、自分たちの真意が見破られたからそのような行動に出ました。彼らの真の姿が、ゼルバベルが妥協しないことによって露わにされました。これはある意味、私たち一人一人が、キリストに出会う時に経験します。自分はそれほど悪い人間ではないと思っています。けれども、キリストを受け入れる、キリストに従うということに取り組む時に、こんな悪い思いが自分の内にあったとは！という驚愕するのです。キリストに対面することによって、自分の真の姿が炙り出されます。

5 節に「さらに、議官を買収して彼らに反対させ、この計画を打ちこわそうとした。このことはペルシヤの王クロスの時代からペルシヤの王ダリヨスの治世の時まで続いた。」とあります。エズラは今、一時的な反対運動の話をしているのではなく、何年にも渡って、断続的に反対阻止運動が行われたことを書き始めています。正確には、クロスが帰還の布告を出し、彼らが神殿の礎を築いて建築を始めた紀元前 535 年の時から、ダリヨスの治世第二年、520 年の時まで続きます。

さらに、エズラは神殿が建設されて以降にも、エルサレムの町の再建に関して反対運動があったことを記しています。4:6 アハシュエロスの治世、すなわちその治世の初めに、彼らはユダとエルサレムの住民を非難する一通の告訴状を書いた。

アハシュエロス王は、エステル記に出てくるエステルが妻となるアハシュエロスのことであり、一般的にはクセルクセスとして知られている人物です。彼は、紀元前 485 年から 465 年までペルシヤを治めていました。その治世の初めですから、この訴状は紀元前 464 年に書かれたものと思われます。ですから神殿が建てられたずっと後のことで、エルサレムの町の再建について反対する書状であると思われます。

2B 「反抗の民」という誹り 7-24

7 また、アルタシャスタの時代に、ビシュラム、ミテラダテ、タベルとその他の同僚は、ペルシヤの王アルタシャスタに書き送った。その手紙はアラム語の文字で書かれ、アラム語で述べられていた。

アルタシャスタ王は、ネヘミヤ記の時のペルシヤ王です。464 年から 424 年に治めていた人です。この書状は、神殿再建のことではなく、城壁の再建のことであることを、13 節を見ると分かります。「その城壁を修復し、その礎もすでに据えられています。」とあります。ネヘミヤ記において、ネヘミヤがエルサレムに帰還することを王に願い出るのは、アルタシャスタの治世第二十年と書いてあります(2:1)。その時には王はエルサレム再建の許可を出しているのです。この書状はそれ以前に送られたものでしょう。ネヘミヤは、「…残りの者たちは、非常な困難の中にあり、またそしりを受けています。そのうえ、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われています。(1:3)」という知らせを受け取って、祈り、悲しみ、それで王にエルサレムに戻る許可を得ています。

ですから、この書状こそが、そしりを与え、城壁を崩されたままにさせる書状の一つであったといえます。

ちなみに、これから聖書の原文は、アラム語になります。6章18節までアラム語で書かれています。アラム語は当時の貿易言語であり、他民族間の意思疎通のために用いられていた言語です。この書状はヘブル人とは無関係でペルシヤの王に対して書かれていますから、言語を変えたのでしょう。似たような言語の交替をダニエル書にも見ますが、2章から7章までがアラム語で書かれています。終わりの日に至るまでの世界を支配する大国についての幻であり、ユダヤ人向けではなく、諸国向けに書かれている内容だからです。

4:8 参事官レフム、書記官シムシャイはエルサレムを非難して、次のような手紙をアルタシャスタ王に書き送った。9 すなわち、参事官レフム、書記官シムシャイ、その他の同僚、裁判官、使節、役人、官吏、エルク人、バビロン人、シュシャンの人々、すなわち、エラム人、10 その他、名声高い大王オスナパルがサマリヤの町と川向こうのその他の地に引いて行って住ませた民たちが、書き送った。さて、

「川向こう」というのは、ユーフラテス川の向こうという意味です。ペルシヤの首都シュシャンは今のイランにありますから、そこから見てユーフラテス川の向こうを、「川向こう」と呼んでいました。

4:11 彼らが送ったその手紙の写しは次のとおりである。「川向こうの者、あなたのしもべたちから、アルタシャスタ王へ。さて、12 王にお知らせいたします。あなたのところから、こちらに来たユダヤ人たちはエルサレムに行き、あの反抗的で危険な町を再建しています。その城壁を修復し、その礎もすでに据えられています。13 今、王にお知らせいたします。もしこの町が再建され、城壁が修復されたら、彼らはみつぎ、関税、税金を納めなくなるでしょう。そうすれば、王の収入に損害を与えることになりましょう。

彼らの訴えは、ユダヤ人たちが反抗的で危険な町を建てるというものであり、みつぎや関税、税金を納めないという内容です。その根拠を次に話します。

4:14 さて、私たちは王宮の恩恵を受けておりますから、王のはずかしめを見るのに耐えられませんが、それゆえ、私たちは人を遣わして、王にお知らせするのです。15 あなたの先祖の記録文書をお調べになれば、この町が反抗的な町で、王たちと諸州に損害を与え、また昔からこの町で反逆が行なわれたことを、その記録文書の中に見て、おわかりになるでしょう。この町が滅ぼされたのも、そのためです。16 私たちは王にお知らせします。もしこの町が再建され、城壁が修復されたら、あなたはこのために川向こうの領土を失ってしまわれるでしょう。」

敵によるそしりは、いつも真実を含んでいます。ここに書かれてあることは、全く根拠のないもの

ではありません。エルサレムは、バビロンに対して反抗しました。エレミヤはバビロンに従えという神の命令を語りましたが、彼らは反抗しました。しかし、もちろん悔い改めた彼らには、その意図は毛頭ありません。彼らは、支配するペルシヤが自分たちにとっての問題だと思っ
ていません。自分たちが神ご自身に不従順であることが問題であると思っ
ています。

4:17 王は参事官レフム、書記官シムシャイ、およびサマリヤと川向こうのその他の地に住んで
いる彼らの同僚に返事を送った。「平安があるように。さて、18 あなたがたが、私たちに送ったあの
書状は、私の前で説明して読まれた。19 私は命令を下し、調べさせたところ、その町は昔から王
たちに対して謀反を企て、その町で暴動と反逆が行なわれたことがわかった。20 またエルサレム
にはかつて勢力のある王たちがいて、川向こうの地を全部支配し、みつぎ、関税、税金が彼らに
納められていたこともわかった。21 今、あなたがたは命令を下して、その者たちの働くのをやめさ
せ、私が再び命令を下すまで、この町が再建されないようにせよ。22 あなたがたは、よく注意して
このことを怠ってはならない。損害を増して王を傷つけるといけないから。」23 アルタシャスタ王の
書状の写しがレフムと、書記官シムシャイと、その同僚の前で読まれると、彼らは急いでエルサレ
ムのユダヤ人のところに行って、武力をもって彼らの働きをやめさせた。

王は、彼らの訴えに唆されました。かつて反抗的な町であるということに加えて、ソロモンの時代、
その地域をすべて支配して、貢物や関税、税金が納められていたという事実も引き合いに出して
います。そして、この返書をもって総督や書記官が、武力をもって彼らの働きをやめさせました。

ここで大事なのは、彼らは全くにでっち上げを作っていないということです。けれども、そうい
う時代もあったけれども、今のユダヤ人にその意図があるというところに偽りの告発をしています。
これが悪魔の手法です。悪魔は、「兄弟たちの告発者」と黙示録 12 章で呼ばれています。その手
法は巧妙です。彼は、私たちの罪や落ち度に一斉攻撃をしていきます。その弱みを掴んで、すべ
ての真実を捻じ曲げます。

例えば、「あなたには、神に助けを求める権利などないのだ。」と囁きます。事実、罪人は神に祈
りを聞いてもらえないという御言葉があります。しかし、その罪がキリストの流された血によって取
り除かれたのです。だから、今は大胆に神に近づくことができます。そして、「あなたは十分に祈っ
ていない。」と言って、祈りが聞かれない、また悪いことが起こっているのだと言ひ含めます。そう
でしょうか、父なる神は私たちの弱さを御霊によって助けてくださり、言いようもないうめきによって
御霊が執り成してくださるのです。そして、「あなたは肉の醜い部分を出したね。もうクリスチャンと
して終わりだ。」と囁きます。そうでしょう、誤ったでしょう、しかしいつも主は弁護者であるイエス様
の弁護を受け入れてくださいます。このように、悪魔は私たちの行ったことを取り上げて、そして一
気に責め立てるのです。これだけを覚えておきましょう、「こういうわけで、今は、キリスト・イエスに
ある者が罪に定められることは決してありません。(ローマ 8:1)」。

4:24 こうして、エルサレムにある神の宮の工事は中止され、ペルシヤの王ダリヨスの治世の第二年まで中止された。

「こうして」とありますが、ここではアルタシャスタ王の書状のことではなく、最初の話に戻っています。ゼルバベルが建てていた神殿に対してサマリヤ人が反対して、その結果、神の宮の工事が中止されたということです。ですから、6 節、また 7 節から 23 節までは、ゼルバベルの時からずっと後に起こったことなのですが、これらの反対運動の始まりがゼルバベルの神殿建設に対する反対から始まったことを示したかったのだらうと思われます。

2A 工事の再開 5

このようにして反対は、一見、成功したかのように見えます。しかし、神のご計画を妨げることは決してできません。主は二人の預言者をお立てになります。

1B 主が共におられる預言 1-5

5:1 さて、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの、ふたりの預言者は、ユダとエルサレムにいるユダヤ人に、彼らとともにおられるイスラエルの神の名によって預言した。2 そこで、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツアダクの子ヨシュアは立ち上がり、エルサレムにある神の宮を建て始めた。神の預言者たちも彼らといっしょにいて、彼らを助けた。

午前礼拝で学びましたが、彼らには恐れがありました。落胆がありました。それに加えて、生活の安定という要素がありました。とてつもない反対の力の中で彼らは、今は主の時ではないと言いながら、その間、自分たちのことで忙しくしていました。けれども、神殿を建てることは主の御心です。主は、モーセによって与えられた律法にしたがって、彼らの不従順にしたがって作物の不作を与えられました。そのことをハガイがはっきりと伝えて、それでゼルバベルとヨシュアは主に立ち上がったのです。

ここですばらしいのは、二つの言葉です。一つは、「彼らとともにおられるイスラエルの神」であります。神は共におられます。独り捨て置かれているのではない、ということです。また神が共におられるというのは、神が味方しておられるということです。問題が起こると、私たちは敵対の空気の中で心が折れてしまいます。しかし、神はご自分の御心を行う者には必ず味方しておられて、問題もその中で神は引き起こされています。そして、もう一つは彼ら預言者二人も、ゼルバベルとヨシュアと共にいて、その建築を助けたということです。この預言者は、ご聖霊のような働きをしています。ご聖霊は、私たちのそばに来て助けてくださいます。私たちも、聖霊の導きに従いたいですね。つまり、互いにそばに来て助けるように導かれるのです。斜めに見て、人々のしていることと距離を取るではありません。

5:3 そのとき、川向こうの総督タテナイと、シェタル・ボズナイと、その同僚とがやって来て、こう言

った。「だれがあなたがたに命令を下して、この宮を建て、この城壁を修復させようとしたのか。」4
そしてまた、「この建物を建てている者たちの名は何というのか。」と尋ねた。5 しかし、ユダヤ人
の長老たちの上には神の目が注がれていたので、このことがダリヨスに報告され、ついで、このこ
とについての書状が来るまで、この者たちは彼らの働きをやめさせることができなかった。

主の勝利です。この総督タテナイは、パレスチナ地方とシリア地方の全域を治めていた総督でし
た。そして、役人としてこの宮は建てることはできないと詰め寄ってきたのです。けれども、彼らは
その働きをやめさせることができませんでした。これは、主の勝利です。ゼルバベルとヨシュア、ま
た他のユダヤ人たちに勇気が与えられました。彼らは、自分自身という敵に打ち勝つことができま
した。主のことばを恐れて、それに従ったところに勝利の鍵があります。

そしてもう一つ、「神の目が注がれていた」とあります。主の仕事に取りかかる時に、主の御心を行
っている時に、主は御目を私たちに注いでいてくださいます。だから、妨げるものは何もありま
せん。

2B 役人の書状 6-17

5:6 川向こうの総督タテナイと、シェタル・ボズナイと、その同僚の川向こうにいる知事たちが、ダ
リヨス王に書き送った手紙の写しは次のとおりである。7 すなわち、彼らが王に送った報告には次
のように書かれてあった。「ダリヨス王に全き平安がありますように。8 王にお知らせいたします。
私たちはユダの州に行き、あの大きな神の宮に行ってみました。それは大きな石で建てられて
おり、壁には木材が組まれていました。その工事は彼らの手で着々と進められ、順調にはかど
っています。9 そこで、私たちはその長老たちに尋ねて、彼らに次のように言いました。『だれがあ
なたがたに命令を下して、この宮を建て、この城壁を修復させようとしたのか。』10 私たちはまた、
あなたにお知らせするために彼らにその名を尋ねました。それは、彼らのかしらになっている者の
名を書きしるすためでした。

四章にあるような悪意ある非難の書状ではなく、許可の所在を尋ねる官僚の言葉であります。

5:11 すると、彼らは次のように私たちに返事をよこして言いました。『私たちは天と地の神のしも
べであり、ずっと昔から建てられていた宮を建て直しているのです。それはイスラエルの大王が建
てて、完成させたものです。5:12 しかし、私たちの先祖が、天の神を怒らせたので、神は彼らをカ
ルデヤ人であるバビロンの王ネブカデネザルの手に渡されました。そこで、彼はこの宮を破壊し、
民を捕えてバビロンに移したのです。

彼らは恐れることなく、イスラエルの神の名を唱え、さらに自分たちがこの神に罪を犯したことを
伝えて、その裁きを受けたことも隠さずに話しています。

5:13 しかし、バビロンの王クロス王の第一年に、クロス王はこの神の宮を再建するよう命令を下しました。14 クロス王はまた、ネブカデネザルがエルサレムの神殿から取って、バビロンの神殿に運んで来た神の宮の金、銀の器具を、バビロンの神殿から取り出し、自分が総督に任命したシェシュバツアルという名の者にそれを渡しました。15 そして、シェシュバツアルに、これらの器具を携えて行って、エルサレムの神殿に納め、神の宮をもとの所に再建せよと言いました。16 そこで、このシェシュバツアルは来て、エルサレムの神の宮の礎を据えました。その時から今に至るまで、建て続けていますが、まだ完成していません。』

クロス王の命令であることを明言しました。また、シェシュバツアルは、ゼルバベルのバビロン人またペルシヤ人向けの名前です。

5:17 ですから今、王さま、もしもよろしければ、あのバビロンにある王の宝物倉を捜させて、エルサレムにあるこの神の宮を建てるためにクロス王からの命令が下されたかどうかをお調べください。そして、このことについての王のご意見を私たちにお伝えください。」

ペルシヤ帝国は、このように書面による資料を膨大に保管して、その書面によって政治と行政を行うという、今に通じる法令による統治を行っていました。エステル記でも、その書状のやりとりによってユダヤ人抹殺の危機が来て、またユダヤ人の救いの書面も出ました。

3A 神殿の完成 6

1B 補強する命令 1-12

6:1 それで、ダリヨス王は命令を下し、宝物を納めてあるバビロンの文書保管所を調べさせたところ、2 メディヤ州の城の中のアフメタで、一つの巻き物が発見された。その中に次のように書かれていた。「記録。3 クロス王の第一年に、クロス王は命令を下した。エルサレムにある神の宮、いけにえがささげられる宮を建て、その礎を定めよ。宮の高さは六十キュビト、その幅も六十キュビト。4 大きな石の層は三段。木材の層は一段にする。その費用は王家から支払う。5 また、ネブカデネザルがエルサレムの神殿から取って、バビロンに運んで来た神の宮の金、銀の器具は返し、エルサレムの神殿に運び、一つ一つもとの所に戻す。こうして、それらを神の宮に納める。」

相当の調査をしたことが伺えます。ペルシヤ中の文書保管書を捜したようです。そして、エズラ記1章には出てこなかった内容ですが、宮の高さや幅、またその造りも含めてクロス王が命令を下していました。そして次に逆転劇が起こります。

6:6 「それゆえ、今、川向こうの総督タテナイと、シエタル・ボズナイと、その同僚で川向こうにいる知事たちよ。そこから遠ざかれ。7 この神の宮の工事をそのままやらせておけ。ユダヤ人の総督とユダヤ人の長老たちにこの神の宮をもとの所に建てさせよ。8 私は、さらに、この神の宮を建てるために、あなたがたがこれらユダヤ人の長老たちにどうすべきか、命令を下す。王の収益として

の川向こうの地のみつぎの中から、その費用をまちがいなくそれらの者たちに支払って、滞らぬようにせよ。9 また、その必要とする物、すなわち、天の神にささげる全焼のいけにえのための子牛、雄羊、子羊、また、小麦、塩、ぶどう酒、油を、エルサレムにいる祭司たちの求めに応じて、毎日怠りなく彼らに与えよ。10 こうして彼らが天の神になだめのかおりをささげ、王と王子たちの長寿を祈るようにせよ。11 私は命令を下す。だれであれ、この法令を犯す者があれば、その家から梁を引き抜き、その者をその上にはりつけにしなければならない。このことのため、その家はごみの山としなければならない。12 エルサレムに御名を住まわせられた神は、この命令をあえて犯しエルサレムにあるこの神の宮を破壊しようとして手を出す王や民をみな、くつがえされますように。私ダリヨスは命令を下す。まちがいなくこれを守れ。」

なんと、ダリヨス王はかつてのクロス王の命令に沿って、この建築を強化し、国家予算を使って支援し、これを妨げる者に厳しい罰則を設けるといふ命令を出しました。「王の心は主の手の中にあって、水の流れのようだ。みこころのままに向きを変えられる。(箴言 21:1)」と箴言にあります。ダリヨス王の心を水の流れのように変えられたのは他でもない、主ご自身です。この役人たちは、この建設をやめさせようとしたのですが、反対にこの建設を強力に推進しなければならなくなりました。

私たちはここから、大きな励ましを得ることができます。私たちが主に従い、この方のところに身を隠しているなら、主が必ずすべてのことをご自身の目的のために働かせるということです。「あなたを攻めるために作られる武器は、どれも役に立たなくなる。また、さばきの時、あなたを責めたてるどんな舌でも、あなたはそれを罪に定める。これが、主のしもべたちの受け継ぐ分、わたしから受ける彼らの義である。主の御告げ。」(イザヤ 54:17)」反対している者たちが、かえってその働きの後押しをするような、神のどんでん返しが私たちに用意されています。

例えば現在、迫害されている国々の中で、地下教会の信者たちが爆発的に増えています。すぐに思い出すのは中国、もう一つはイランです。どちらの国の人も、その政権が倒れることを望んでいません。イランでは、1979年にイスラム革命が起こり、それからイスラム主義による政治が行われていますが、教会に対する迫害が酷くなったのですが、なんとイスラム革命の時からイランでキリスト者が急速に増えていったのです。主が、反対者たちを神の国の拡がりのために用いられるのです。そこで、大事なことは私たちが、ゼルバベルやヨシュアと同じように神の御心の中に留まっていることです。このことをしてさえいれば、主が戦ってくださるのですから私たちは無敵です。

2B 主の与える喜び 13-22

6:13 このように、ダリヨス王が書き送ったので、川向こうの総督タテナイト、シエタル・ボズナイと、その同僚たちとは、これをまちがいなく行なった。14 ユダヤ人の長老たちは、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの預言によって、これを建てて成功した。彼らはイスラエルの神の命令により、また、クロスと、ダリヨスと、ペルシヤの王アルタシャスタの命令によって、これを建て終えた。

初めに、この建設が神の強い意志であったこと。そして神がそのためにペルシヤの王たちを用いられたことが挙げられます。ダリヨスの次にアルタシャスタの命令も書かれていますが、4章で見たようにアルタシャスタは城壁再建をやめさせる命令も出していますが、ネヘミヤ記においては城壁を再建させる許可も出しています。そして、この命令にしたがうに当たって、二人の預言者の預言が人々を鼓舞させたのでした。私たちの教会が、そうなってほしいですね。主の御心から始まり、それによって動かされ、絶えず神の言葉によって励ましを受けて前進していく教会です。

6:15 こうして、この宮はダリヨス王の治世の第六年、アダルの月の三日に完成した。

これは紀元前 516 年あるいは 515 年のことです。神殿がバビロンによって破壊されたのが 586 年なので、ちょうど七十年後です。興味深いことに、第一次バビロン捕囚が紀元前 605 年で、ユダヤ人がエルサレムに帰還したのは 536 年から 535 年辺りで、この期間も七十年であります。神殿破壊と再建の七十年、捕囚と帰還の七十年のどちらにもおいて、エレミヤの預言は成就したのでした。そして、彼らは工事再開してから四年間で完成させています。

6:16 そこで、イスラエル人、すなわち、祭司、レビ人、その他、捕囚から帰って来た人々は、この神の宮の奉献式を喜んで祝った。17 彼らはこの神の宮の奉献式のために、牛百頭、雄羊二百頭、子羊四百頭をささげた。また、イスラエルの部族の数にしたがって、イスラエル人全体の罪のためのいけにえとして、雄やぎ十二頭もささげた。18 また彼らは、エルサレムでの神への奉仕のため、祭司をその区分にしたがって、レビ人をその組にしたがってそれぞれ任命した。モーセの書にしるされているとおりである。

神の宮の奉献式を彼らは喜んで祝いました。いけにえの頭数は、かつてのソロモンの神殿の奉献式に比べれば無に等しいものですが、彼らはもはや比較していません。ハガイによって、ゼカリヤによって与えられた預言によって励まされ、主の幻を見ているので喜んでいるのです。

そしてイスラエル人全体の罪のためとして、雄やぎ十二頭を捧げています。帰還した民の多くがユダとベニヤミンですが、それは他の北イスラエルの部族がいないことを意味していません。彼らに他の部族も加わっていることを、このいけにえの十二の頭数が示しています。そして、帰還の民は、モーセの律法に忠実に従うことに細心の注意を払っていました、「モーセの書にしるされているとおりである。」と祭司とレビ人の務めについて述べています。

6:19 捕囚から帰って来た人々は、第一の月の十四日に過越のいけにえをささげた。20 祭司とレビ人たちは、ひとり残らず身をきよめて、みなきよくなっていたので、彼らは捕囚から帰って来たすべての人々のため、また、彼らの兄弟の祭司たちのため、また、彼ら自身のために、過越のいけにえをほふった。

それで過越のいけにえを行いました。これは、画期的なことであり、イスラエルがエジプトから出た時の記念、そしてイスラエルが民族として神がお立てになった始まりを表しています。そして、何よりもそのためにほふられた子羊は、彼らからエジプトの災い、神の怒りが過ぎ越したことを示しています。その流された血が、彼らを救ったのです。そしてイエス様は、この過越の食事において、裂かれるパンをご自分の肉とし、ぶどう酒をご自身の流される血とされました。

6:21 捕囚から戻って来たイスラエル人と、イスラエルの神、主を求めて、この国の異邦人の汚れから縁を絶って彼らに加わったすべての者たちとは、これを食べた。

これは、午前中に話しましたように、彼らはバビロン捕囚が、異邦人との関わりによって起こったのだという強烈な反省と痛恨に基づいた行動を取りました。純血にこだわりました。またもちろん異教の慣わしからも分離しました。

6:22 そして、彼らは七日間、種を入れないパンの祭りを喜んで守った。これは、主が彼らを喜ばせ、また、アッシリヤの王の心を彼らに向かわせて、イスラエルの神である神の宮の工事にあたって、彼らを力づけるようにされたからである。

過越の祭りの日から七日間、種を入れないパンの祭りです。種を入れないことは、罪が取り除かれたことを意味します。したがって、子羊の血によって罪が取り除かれたことを表し、まさに私たちの主イエス・キリストが行ってくださったことです。そして、ここに「アッシリヤの王の心」とありますが、これは地名であり、アッシリヤ帝国の王ということではなく、ペルシヤの王なのですが、かつてのアッシリヤ地方にいる王ということです。

そして、「主が彼らを喜ばせた」とあります。彼らが祭りを喜んで守り、また先ほどは奉獻式を喜んで祝ったとありました。喜びが彼らに与えられています。ネヘミヤ記を読めば、罪によって悲しんでいた民に対して、ネヘミヤとエズラが、「今は喜ぶ時である。主を喜ぶことはあなたがたの力だ。」と言いました。喜びというのは、どこから出てくるのでしょうか？これは、神との関係から出てくるものです。

パウロが、「いつも喜んでいなさい。(1テサロニケ 5:16)」と勧めました。もし喜びが、環境や周りの状況が良くなっているから沸き起こるものなら、いつも喜ぶことはできません。いつも喜ぶことができるのは、それは周囲の環境ではなく、主との正しい関係が回復されるから出てくるものなのです。パウロはピリピ書において、「いつも主にあって喜びなさい。(4:4)」と命じました。環境にあって喜びなさいではなく、主にあって喜びなさい、と言いました。帰還したユダヤ人が、主に立ち返って、それで主がご自分の目を彼らに注がれて、そうした生きた関係があるから、その中に彼らは喜びを抱きました。

私たちの内にも、喜びが湧きあふれますように。私たちが疲れてしまった時、落胆してしまった時、恐れを抱いた時、そのどうしようもないうめきと叫びを主の前に持っていき、主から御言葉をいただき、魂が慰められる時、私たちは力を受けます。喜びがそこから沸き起こります。